
 <協同のひろば>

—埼玉での協同の可能性をさぐるつどい—にむけて思う

 菊池 陽子 (埼玉県/生活文化・地域協同研究会)

「人間らしく暮らせる為に」この何と抽象的な看板だ事か。

これで「ウン」とうなずきこの集会の意味を早々に理解してくれる人はさて何人いる事やら。

「いま、「協同」を問う、プレ集会を伊東でもったのが1987年。

「いま世の中、金もうけ本位、弱肉強食、人をけ落とさなければ自分が馬鹿を見る……。こんな風潮ばかりのように見える。けれどもよく見ると、そんな中でも助けあい、協力して、自分たちでつくる、運動が意外なほど着実に広がっているのではないか。そうした運動がまずは一度集って「協同、のエネルギーを確かめあい今日の時代の中の「協同、の可能性をみんなで探ってみよう」こうした呼びかけがそこにはあった。

今、埼玉がその呼びかけを大切にしながらはじめの「協同集会」——埼玉での協同の可能性をさぐるつどい——を準備している。

昨年からはじめた「手づくり新聞フェスティバル」(機関紙協会埼玉県本部が事務局)を今年も、という事になり、県内のさまざまところで手づくりの「伝言」は、何を知らせたくて、どんな悩みがあって、心底うったえようとしているのか。さてよ、これは労働の現場で、地域で、学校で、家庭内で、どんな事実があるのかを赤裸々に表現しあう活動ではないか。

だとしたら、この社会不安、孤立、受け身の生き方を克服しようと協同しあう仲間が絶対いるはずだ。この「手づくり新聞」とドッキングして埼玉県内の人間疎外と現代的貧困をえぐり出す場をつくれぬか。そんな中でも心と力を寄せあういとなみ「協同、がどう存在し、どう努力しあっているのかの場」がつくり出せないか。こんな事を思いはじめたのが初夏の頃だった。

埼玉はとりわけ市民活動の多いところ。まず会

場の空もなかなかない。昨年「手づくり新聞」とドッキングをした「子育て文化協同フォーラム(さいたま)」も当然一緒に。ホールで「協同パフォーマンス」もぜひとの事だとホールも付いて……。分科会の話あいも大切と思えば小会議室も同時にないと……。となかなか大変だ。

一方、実行委員会を重ねる中でも「いったい協同ってのは何なのかい……!?」といった質問に気もあせる。がしかし、そういった質問がある度に全員で頭をかかえながら考えあう。これです、という定義だって定まっているわけではない……。そう、だからこそ「いま、協同を問う、んだよ。ところが「協同を問う」という言葉そのものにもクレームが付き、「人間らしく暮らせるために、などというテーマネーミング。私などよけいわからなくなってくる。

しかし、共通して、今の世の中ひどすぎる。何とかしなくちゃ……。の感は全員の胸の中を共通項で結びあっていく。

今まで「それで当たり前」と思っていた受身のくらし方や働き方に、思いきって「さてよ」と思ってみる。そしてくらし変えや働き変えを考えはじめてみる。

「働きたい仕事を通じて人生を設計したい」「本当のゆたかさっていったい何なんだ?」「人間らしく生きつづけられる地域をつくらうじゃないか」という気持が点から線となり面になりつつある。

それらをつなぎあって環境破壊や生活破壊をおこす根源をみつけあい、持続可能な社会関係を創造する為に、人間中心の協同の思想が、金もうけ本位で人間疎外をおこすもの考え方をのりこえていく。そんな実践をもちより交流し、学びあいたいものである。

今、4つの分科会ごとにレポートをどんな活動

をお願いするか検討中である。その作業をする世話人たちの討論の質が、たび重なる中で向上しあっていく。これが集会準備の楽しさだ。

単に外向きの打上げだけではなく、手間ひまかかるけれども内側の力がどれだけつくかが重要な問題である。ぜひなかみのいい分科会になればと思っているところである。

レポートをお願いするところにしても、これが協同だなどと思ってやっているところはほとんどない。ただひとりではどうしようもない事を皆でやれば元気がでる……そんな実感をもちながら毎日を送っている人達であるから、その事にどんな哲学があり、どんな運営原則になって、成功している実践例ではどんな事をだいにしてきたからなのかを学びあえる場にしあえたらこのうえない。

だから、すでに実践を積み重ねているところの農業協同組合や消費生活協同組合からも実践報告をうけ、おおいにこの運動のリードをしてほしいところである。

また、自治体に働きみなさんとも協同、連帯しあえる部分を共に考えあおうではありませんか。

さて、集った人々が自分達のしている事、またこれからしようとしている事に確信をもつ為にも、それらの理論的筋道をもつ必要があることは当然である。

これまで地域協同集会がもたれた、長野県・北海道・青森・山形鶴岡などでの集会は、研究職の方々が多大なお力でリードされた事を思う時、残念ながら大学共通一次試験の当日とも重なり、大学関係者がお忙しい日と聞く。

幸い地元にお住いの大田堯先生を全体会をお迎えする事ができ、大変心強く、何としても成功させたいと考えているところである。

大田先生は教育学会のみならず、人間そのもののご研究をされている重鎮であり、今の社会のありように対してもするどい御指摘をいただけるものと確信している。

また、協同総研からは太田貞司先生と菅野専務が援助して下さる事になっているし、実行委員長

にはひかえ目ながら実力者の、元日本生協連常務として協同組合の専門家である坪井俊二氏（日本ユーラシア協会埼玉県連会長）が受けて下さり、ホッとしているところである。

ジョイント企画の「手づくり新聞」に何を発見するか、また「子育て文化協同」におけるパフォーマンスは何を意味するものなのか。その中にも「おこすべき仕事」が山積しているように思えてならない。

そしてテーマごとの分科会では何が見えてくるか、皆目わからない。予想すらできない。

しかし、「協同」が異質のものたちの集りで、考えられもしなかった効果が誕生するとしたら、私はそれを信じていたい。

今、私たちをおおう人間疎外の数々に対し大きな転換をつくり出さなければなるまい。

しかし、人と人のつながりあいの中で、人中心の社会に変革する事を急ぐあまり、未熟がゆえにもつ私たちの欠陥は何なのか、「協同」のすばらしさに確信をもちながらも、ヒューマンな運動をさらに発展させるべく有頂天にならない謙虚さをもつてのぞみたいと考えているところである。

(集会事務局)

—埼玉での協同の

可能性をさぐるつどい—

人間らしく暮らせるために

日 時：1995年1月14日（土）

会 場：浦和市民会館

参加費：1000円

内 容：パネルディスカッション
分科会